

北の森の動物たちの今 (10)

動物たちの今を知る：野生生物観測の現在

ひら かわ ひろ ふみ
平川 浩文

(森林総合研究所北海道支所)

野生動物の保護や管理のためには彼らの置かれた状況の把握が必要となる。そのために求められるのが観測（継続的な生息調査、いわゆるモニタリング）だ。しかし、現在行われている観測の多くは、なんらかの問題が生じて初めて（該当種のみを対象に）始められたもの。従来、野生動物一般を対象とする観測手法がなかったため、問題発生の認識は遅れがちで、いざ問題に対処しようとしてもデータがなく、そこに至る経緯がよくわからないという状況にあった。

この状況打開のため、私は中大型哺乳類一般を対象にした観測技術の開発を進めてきた。具体的には、1) 観測のための自動撮影装置の開発、2) 調査手法の開発、3) データ処理技術の開発である。3) には、データを効率的に入力・整理・図化する技術、オンライン3D地図へのデータ・マッピング技術（平川 2014）、データ公開のためのウェブ技術、データや写真の検索技術、などが含まれる。

基礎技術の確立後、私はこれを活かして、北海道内各地にある森林管理局の機関や大学の研究林・演習林・野生生物研究部門と、「北海道野生生物観測ネットワーク」の構築も進めてきた。その枠組みは、森林総研北海道支所が技術を提供し各機関が観測を行う、1対多のネットワークになる。データは観測を行った各機関が自ら管理・活用する一方、森林総研はこれを一括管理し、インターネット上で結果を公開している（「野生生物

観測」で検索）。観測は2006年に始まり、現在では道内14ヶ所で年に1ないし2回の観測が行われている。長いところではすでに10年以上のデータ蓄積があり、興味深い変化が観測されてきた（図1）。

さて、基礎であれ、応用であれ、多くの野外科学は観測を基礎に置く。対象とする現象の状態・変化を知ることが、メカニズムの解明、そして予測や応用につながるからだ。気象学・地震学・火山学などの地球科学はその代表格で、これらはすべて観測が成果に直結する。そのため、新しい観測手法の開発や精度の向上に多くの努力が注がれている。

一方、野生動物管理は観測が貧弱で、多くの場合、未だに対症療法を繰り返している。つまり、問題が生じて初めてその対処を考える、というわけだ。そうした対処は確かに必要で、そのための研究もあって良いだろう。しかし、科学としてそれだけではあまりにもみすぼらしい。野生動物管理が確たる科学となるためには観測の充実が欠かせない。

北海道野生生物観測ネットワークは世界に先駆ける野生動物観測の実践例。技術の活用を優先して後回しになった論文化を急ぎ、世界の研究者にその大いなる可能性を示したいと、今考えている。

引用文献

- 1) 平川浩文. 2014. Google Earthを用いた野生生物観測データの地図化. 森林総研研究報告13: 155-171.

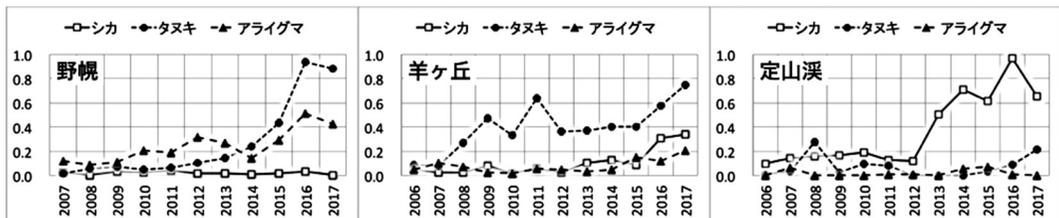


図1. 札幌近郊の3観測点で観測された動物撮影頻度変化の例（縦軸は装置1台1日あたりの撮影頻度）

*本稿をもって本シリーズは終了します。(編集責任：平川浩文)